

昭和二十四年

七月二十三日

第三種郵便物認可  
發行(毎月一回・十五日發行)

(通第一八九号)

# 慈

# 光

第十七卷

第二号

## 目

一切衆生悉有仏性(一) ..... 近角常観 ..... (1)

内は愚にして外は賢なり ..... 福島政雄 ..... (6)

遠く宿縁を慶ぶ ..... 花田正夫 ..... (9)

## 次

池山先生建碑讚 ..... (14)

一道会の記 ..... 柳原徳草 ..... (16)

## 一切衆生悉有仏性 (一)

### 近 角 常 観

今日の題は「一切衆生悉有仏性」というのであります。これは、一切の衆生悉く仏性がある、ということ、仏教では名高き言葉である。この一切衆生、誰でも悉く仏に成る可き種を持つて居るといふことを申します。

これは仏教の上では常に言う事でありますが、我が親鸞聖人はこの一切衆生悉有仏性ということに次の如く御示し下された。

聖道門の教では、一切衆生悉有仏性は、自分々の身体に一人一人仏性が有つて、一人一人が悟つて仏に成るといふ意味なれども、他力の教から言う時は、悉有仏性ということとは然ういうことではない。お互、罪深き人間が、このたび仏に成れるというは、我々が自分の力で成れるのではない。この者が仏に成らせて貰えるは、ひとえに如来広大の御本願のお力によりて、頂かせて貰う処の御信心一つによりて初めて仏に成らせて貰うの故、他力に於ては聖道門の悉有仏性とは大に異り、如来の遣る瀬なき慈悲によりて、我々信心を得、仏に成らせて貰う事が、一切衆生悉有仏性であるとお示し下されてある。これは信心仏性という

て古より名高い御教化なれど、よく／＼この思召の程を頂かせて貰いたいと思ふ事である。ことに近頃は『歎異抄』の第四章において

慈悲に聖道浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というはものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐることきわめてありがたし。また浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもうがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏もうすのみぞ末通りたる大慈悲心にてそうろうべき。云々。

とお示し下されたこの御教化は、茲の処をお示し下された御教化ならんと、有難く色々の御縁によりて氣を付けさせて貰うた事故、この事をも御話いたしたいとこの題を出したのであります。

これにつき、第一番に申上げたいのは、聖人が『信巻』に、信心歡喜乃至一念、至心信樂欲生我國、仏の御まこ

と心、お慈悲を頂いた一念に喜びの思いが起る。その如来廻向の信心の味いを『涅槃経』に示された御文を以てお示し下されてある。その御文を拝読して、能くこの思召を頂こうと思ひます。大層堅い御文なれど、

涅槃経に言わく。善男子、大慈大悲を名けて仏性と為す。何を以ての故に、大慈大悲は、常に菩薩に随うこと、影の形に随うが如し、一切衆生は畢に定めて当に大慈大悲を得べし。この故に説きて一切衆生悉有仏性と云うなり。

今の『歎異抄』第四章と照らし合せて頂くと実に有難い聖人の思召では、「大慈大悲を名けて仏性とせず」というは、人を哀れみ、人に与え、人をはぐくむ事が仏性ではない。極楽浄土に往生させて頂き、思うが如く衆生を済度することが出来る処で、初めて大慈大悲は現れて来るのである。このことを聖人はこの御文の上より御覽なされ、大慈大悲はこの娑婆で得べきことでは無く、浄土に参りて仏力によつて思うがごとく衆生を利益するを言うべきなりと御示し下されたのが歎異抄の第四章であると気付かせて貰い、「慈悲に聖道浄土のかわりめあり」の御教化は、ここから来たことと、つくづく喜ばせて貰うたことである。

『歎異抄』第四章の御教化は、普通では一寸わからぬ。何故このような事をここに特にお示し下されたかがわからぬ。

貰うて居るが、これが只文句の上より躰たはんで居るのではない。私が『歎異抄』の第四章の文に、殊に、氣を付けさせて貰うたは何時かというに、七年前父に別れた時である。それまでは「慈悲に聖道浄土のかわりめあり、云々」斯うまで冷かに言わずともと思つて居た。

それがいよ／＼父の病氣により故郷に帰り、さてどうかして、どうかしてと思ひ種々身心を傾けて考えて見ても、無常の世の中には何とも仕様がな、弥々時節来りし時は、その一分一時の間と雖も、人間の力では何ともする事が出来ぬと知らせて頂いた時、つら／＼この御教化を有難く味わせて頂いたのである。

現在自分の親が病苦で苦しんでいる。代れるものなら代り度く思うて居ても、代る事が出来ぬ。人間の習い、何んとも仕様がな。そういう人間が、慈悲とか、救うとか、助けるとか言うた処が仕様がな。一切衆生悉有仏性という事は、言葉の上は兎に角、我々実際にそんな事行ふ事が出来ぬ。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあること無きに、唯念仏のみぞまことにておわしますとこそ仰せは候いしか」。我々はこの世に於て、何で安心し、何で大慈大悲を得させて貰ふ事が出来るかというに「唯念仏のみぞまこと

ぬ。されど聖人の御意にする時は、今の『涅槃経』の御文に「善男子、大慈大悲を名けて仏性とせず。……一切衆生は畢に定めて当に大慈大悲を得べし。この故に説きて一切衆生悉有仏性というなり云々」

大慈大悲という事は、聖道門の意味する時は、大慈大悲を自分で行ふという事になるかも知れぬ、が思うようにならぬ。我々にそれが出来るかというに出来ぬ。

が「浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲をもて云々」。この大慈大悲ということは、我々が南無阿弥陀仏を頂く一念に、はやこの娑婆に居りながら、ちやんと仏になるべき身にさせて頂くの故、此の世では思うが如く助け遂ぐる事能わずとも、はや其一念に、大慈大悲の種を獲得させて頂くのである。故に「一切の衆生、ついに定めて当に大慈大悲を得べし。この故に説きて、一切衆生悉有仏性と云うなり」である。この広大の御慈悲を誰でも得る事が出来る故に「一切衆生悉有仏性」である。我々この広大の御慈悲を頂く一念に、はや未来必ず浄土に往生して衆生済度が出来る者と決まつてある、故に「当に」である。これを真宗では当益とうえきという。実にこれは有難い御文であります。

斯くの如く『教行信証』と『歎異抄』との御示しにより、いつも此のような細かい事まで照し合せて喜ばせて

にておわします」この一言である。

それ故、氣を付けて言うに、『歎異抄』の第四章は、我々此の世では助ける事が出来ぬ、未来成仏してと、未来という事に重きをおいているのであるが、命の終るといふことが重でない。この世で念仏のまこと一つを得させて貰うた一念に、はや此の世で得させて置いて下さるのである。

「いそぎ仏になりて云々」よりも、「念仏して」とある、この念仏の一句に氣をつけねばならぬ。「今生にいかにかとおし不便とおもうとも、存知の如く助けがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏申すのみぞすえとおひたる大慈悲心にて候うべき」。念仏のまこと一つを頂く一念に、はやこの大慈大悲は得させて下されてあつたのである。未来この大慈大悲が現われるように、はやこの信心の一念にちやんと定めて置いて下されたのである。この信心の一念が一切衆生を助ける大慈大悲を頂く一念じやそよと、御示し下されたが、此の歎異抄第四章の御教化である。

今までも度々申したのでありますが、今一度くり返し申しますならば、私がこの春、母の病氣に遇い国に帰つた時、新に氣付かせて頂いたのは何かというに、今申すが如く、先に父の病氣の時には一思うが如く助け遂ぐる事ありがたし云々」の御言葉に氣付かせて頂いた事でありました

が、此のたびは、

平生の時、善知識のことばの下に、帰命の一念を發得せば、其の時をもて娑婆の終り臨終と思ふべし（執持鈔）この御言葉に氣付かせて頂く処が多かつた。我々思うさまに人を哀れみ、人を救うという大慈大悲の實現するのは、身滅の後であるが、そう出来る大慈大悲の大もととは、平生の時、帰命の一念の發得して、其時にこれを頂かして貰うという、ここを能く頂かねばならぬ。

又度々申す事なれど、その歸りに丸茂様の母御の御病床に参り『歎異抄』を読ませて貰つて、突嗟の間に氣付かせて貰うた事は

その故は、弥陀の光明に照らされまいらする故に、一念發起する時、金剛の信心をたまりぬれば、すでに定聚のくらしいにおさめしめたまいて命終すれば、もろ／＼の煩惱惡障を転じて無生忍をさとらしめたまうなり。

の御文である。その時この文を読ませて貰うて、このたび病氣で命終るとも、命の終るはこのたび初めて終るのでは無い。一念發得したその時に、はやこの世の命は終つて居るのじやぞというこの御教化に氣付かせて頂いた。そうして見ると、今病氣で命終るともさらに心配は無い。この病室の中が直ぐに本願の船、周囲の有様が直に本願の海であ

る。所謂、

大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転ず。（行巻）

である。ちつとも心配することは無いと、お話し申して来た事であつた。

これも数日前筆執りつゝ氣付かせて貰うた事でありませうが、我々は、本願の船というと、船の譬の方にのみ氣を取られ、船の方ばかり思うて、肝腎の大慈大悲の本願の方を船の形容のように思うてしまふ。そうでは無い、船の方が本願の形容である。船の方が本願の形容であるのに、形容の船の方にばかり重きを措く時は、如来の遣る瀬なき、何うかして救うて遣りたいという本願の親心の程が頂かれな。如来本願の遣る瀬なき親心が、この私を連れて往つて下さるの故に、大悲の願船であるぞよと、船の方を譬にお示し下されたのである。

『和讃』に

煩惱にまなこさえられて 撰取の光明みざれども、  
大悲ものうきことなくて つねに我が身を照らすなり  
我々は常に罪業深重のために眼曇りて居れども、大悲の親心、この者を遣る瀬なく思召し、この者を救わんとある広大の御心故に、この御心が船である。この親心をきく一念に罪重きこの者が、易す／＼と其の船に浮ばせて貰うの

である。平素船々と申して居れど、その船が如来の遣る瀬無き本願の船故に、この罪惡深重の者が、軽ろ／＼と浮かばせて貰えるという、ここを能く頂かねばならぬ。その、「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転ず」である。その親心の頂く一念に、光明中の身となつて、生死の苦海波立たず、何の心配もなくなつた有様が、光明の広海に浮ばせて貰うた味いである。又『和讃』に

大願海のうちに 煩惱の波こそなかりけれ  
弘誓の船にのりぬれば 大悲の風にまかせたり

如来広大の親心の聞こえる一念に、はやこの世からこの尊き身の上にさせて貰う。この一念に「至徳の風静かにして衆禍の波転ず」である。『文類聚鈔』の中に

大悲の願船には 清浄の信心を順風となし  
無明の闇夜には 功德の宝珠を大炬となす  
とお示し下されたもこのわけである。『歎異抄』の第十四章に

「弥陀の光明にてられまいらするゆえに、一念發起する時、金剛の信心をたまりぬれば、すでに定聚のくらいにおさめしめたまいて命終すれば、云々」  
とあるは、即ちここをお示し下されたのであります。

而してこの十四章の文は、前にいう第四章と同様の思召

である。平日、第四章の思召は、未來浄土に参りて衆生を助けると頂いて居るのであるが、斯く頂いて来ると、その助ける事の出来るは、平生の時「念仏していそぎ仏となりて」である。「念仏申すのみぞ、未通りたる大慈悲心にて候べき」である。

平生、念仏の一念にこの御利益は、ちやんと頂いて仕舞うて居るのである。斯く頂いて、今の『涅槃經』の文を拝読すると実に有難い。

——『涅槃經』に言わく、善男子、大慈大悲を名けて仏性と為す……人を救い、人を助ける大慈大悲が仏性であるとお示し下されたのである。大慈大悲は仏が衆生を救うて下さる場合でなければ言わぬ。この人を救い、人を助ける大慈大悲を仏性とする。

——「何を以ての故に、大慈大悲は常に菩薩に随うこと……一切衆生は畢に定めてまさに大慈大悲を得べし。この故に説きて、一切衆生悉有仏性と云うなり」……この大慈大悲は、菩薩の身には常に有るが、一切衆生は皆その菩薩の身として頂くことが出来る。一切の衆生は皆念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心を以て思うが如く衆生を利益することが出来る身として頂くことが出来る故に、一切衆生悉有仏性であるとお示し下されたのである。

未完

愚禿鈔のはじめに「賢者の信を聞いて、愚禿が心を顯わす。賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり」とある。

この愚禿鈔は親鸞聖人八十三才の作であるが、私はこの愚禿鈔を二十六才の時から読み、味わい続けて、今ではこの様な老境に達してしまつた。この句の味わいは深く、なか／＼味わい尽すことは出来ない。

また聖人は、本典の信巻に、善導大師の散善義を引用して「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり」と読んでおられる。ところが善導大師のもととの本意は「外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ」という意味だつたという。後者は道德的な教訓という感じが強いが、聖人の読み方では、宗教的自覚の言葉として、私に迫ってくるものがある。外面は如何にも真面目で賢そうだが、その様な姿を現す資格はない。内心はウソ偽りばかりだから——という宗教的自覚である。私自身も長い間この言葉を聞かせていただいているが、一体そのことが、私自身にどんな意味をもっているの

であると、私は考えている。そこで法然上人と、親鸞聖人について考えてみたい。

私が学生時代に、日本仏教史の講義をなさつていた村上專精先生は、「法然上人は、日本歴史に稀に見る非常に円満な人格の方である。慈悲の法然上人である」と言つておられた。いろ／＼本を読んでみると、慈悲円満の法然上人も、四十三歳以後のことであつて、源内武者貞明（サダアキラ）に父が討たれた時は、御年九才の少年であつたが、弓に矢をつがえて、タイ松の炎の向うに立つ貞明の眉間に射抜いたという勇氣のある強い少年であつた。父の遺言にしたがつて出家した上人は、その才智で、寺の学僧を驚かした。比叡の山に登つた上人が持つていた手紙には「普賢の像を贈る」と書いてあつたが、上人がをれらしきものを持つて居ないのに氣の附いた比叡の僧が、フト上人を見た時に「この聰明な眼をした若い僧が、普賢である」と氣附いたという。それが御年十五才の秋であつた。

そして四十三才までの十八年間、比叡に居られ、智慧の法然と讃えられたのである。善導大師の「一心専念弥陀名号」を体得された時、御年四十三にして慈悲円満の法然上人となられたのである。

折から、世は源平の激しい戦いの後で、敵と味方が激しく怨みあうなかで、源氏の武士熊谷直実をはじめ、平家の

だろつかという問題がある。

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり」この言葉の意味は良く解る。ところで「私は外に賢善精進の相を顯しているのだらうか」と内省して見ると、やはり、そういう姿を顯わしている。私を批評して下さる方が「真面目で立派で、いかにも聖人の様だ」とよく言われるが、それがお世辭であれば問題はないが、本気で「真面目一筋で精進する人」と言われると、私の内は、虚仮・不実なのです。

二十才台のころと、七十才台の現在とでは、煩惱の性質も違つてくる。老年になると、この煩惱の枝の先の先まで感じます。しかし、逆に非常に鉄面皮になり、若い頃は、恥かしいと思つたことが、なんでもなくなる。私自身、若い頃は人一倍、親に孝養をした積りておつたが、今考えてみると嘘・偽りで、皆親に可愛がられたという己がための孝養であつたと知るのです。

愚禿鈔の「賢者の信を聞きて、愚禿が心を顯わす」の賢者とは、法然上人を指しており、愚禿とは親鸞上人自身で落武者が敵味方なく法然上人のもとで道を求めた。その法然上人が自らを「十惡の法然房、愚痴の法然房」と自訓せられたのである。弥陀の誓願不思議を戴かれた法然上人は「たしかに自分は、十惡の法然房である」と感じられたのであろう。

さて親鸞聖人のもともとの性質は鋭い、ところを持つておられたと思う。聖人の直弟子が写し、一番聖人の真実を伝えているといわれる「鏡の御影」を拝見すると、頬骨に意志の強さが溢れ、鋭さが漲つているが、眼は優しきを持つている。法然上人のもとにあつて「弥陀の誓願不思議を戴いた聖人の、自分自身に対する見方は師よりもズツト鋭い。そこでこれは私だけの見方だが、『歎異鈔』の「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」の「善人」とは「内愚外賢」の親鸞聖人であり、「悪人」とは「内賢外愚」の法然上人だと思ふ。上人のように素直に「自分は悪人である」と眼の開かれた人は、勿論往生を遂げるのである。しかし弥陀の本願は、親鸞聖人や私自身の様に「内は愚なるにもかかわらず、遂に賢善精進の相を偽る者」をも往生を遂げるといふ不思議の誓願である。他の人は私のこの見方をヒネクレていると評するが、私は私自身を顧みて、このように親鸞聖人の心を戴いている。そして親鸞聖人こそ私を生かして下さる先達と信じている。

「賢者の信」とは、法然上人の弥陀の誓願を素直に戴いた「信」である。「愚禿の心」とは、親鸞聖人の「心」である。「信」に対して「心」を用いたのは深い意味があると思う。唯識論は非常にムヅカシクよく解らないが、煩惱を分析したところは解ります。そこでは「心そのものが煩惱だ」と説かれている。聖人の「愚禿の心」とは唯識論で説く「心そのものが煩惱」であろう。「内愚外賢」とは親鸞聖人自身の告白の言葉である。

私は四十才の頃、西欧の偉大な人物に触れてみたいと考えてソクラテスを研究してみた。ソクラテスは非常に強靱で、足許にもよりつけないと思つた。しかしソクラテスはアポロンの神殿に刻まれた「汝自身を知れ」という言葉に対して「結局、自分が何も知らないということを知つてゐるだけだ」と答えた。智者として、強靱な哲人として世界に名を轟かせたソクラテスの「無知の告白」は、私自身に強い感銘を与えてくれた。けれどもソクラテスは知性の人だ。情意——煩惱の面で法然上人、親鸞聖人の深さには及ぶことが出来ない。

私は親鸞聖人に生かされていると感じている。聖人晩年の手紙に顯われた抱容的なひろびろとした世界が。内愚外賢の心からひらけてきていることを思う時、私自身もそのようになりたいと、念じている。

## 遠く宿縁を慶ぶ

昭和二十四年の春でありました。三重の渡辺知空師が旅先に突然おたずね下さいました。承われれば知空師は明治四十年に早大を卒業されるまで数年間、近角先生のお導きをうけられました。寺院を継いで貰う予定だった弟様が夭折なされたので、郷里に帰つて寺門の経営に専念せられすでに六十五歳になられた由でありました。そうした初対面の挨拶もそこそこに、座を正されて開口一番、

「聞けばあなたは、初め池山先生の導きを永年うけられその後、先生没後は近角先生のおそだてを受けていられるそうだが、先ず、池山先生のおすすめのかなめを一口で聞かせて下さい」

とのことで、私は即座に

「池山先生の生涯くりかえされて、親しきも疎きも、若きも老いたるも、学者も愚者もへだてなく、お勧め下さつた一句はただ念仏して」でありました。

この一句を、よき人の仰せのきわみであり、われらが信仰告白のかなめであり、人に信を勧めるおくので、である。と仰言いました。

仏教文化研究会、文化講座、講演要旨。文責記者。

★ ★ ★

### よき人々の常持語

光遠院 慧空師

「朝な／＼仏とともに起き、夕な／＼仏を抱きて臥す」

——安心決定鈔——

円乗院 宜明師

「道を行くのに、毒草のあるところ必ず棄草あり、凡夫のあるところ仏あり。仏あるが故に凡夫あるにあらず」

利井鮮明和上

「誠なる哉、撰取不捨の真言、聞思して遲慮することなかれ」

★ ★ ★ ——— 教行信証序 ———

## 花田 正 夫

それは初めに先生が社会事業に専念されながらも、実は真実の心はなく、虚名を徒らに追うている自分のあさましさに驚かれ、六高のドイツ語の教授になられたのも、その問題はいよ／＼深刻となり、とうとう四十二歳の時に、人生の目的も見失われ、大疑團に逢着せられた日、歎異抄の二章の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、と、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」の一句がフト心に浮び、地獄一定と仰せられる聖人、その聖人もそうせられたのか、じゃあ池山も、とただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」の仰せに、本願の意趣を「池山一人がためなりけり」と頂かれて以来、御命終の日まで、そのこと一つを繰り返して告げて下さいました。

よきひとの仰せにきて御名を呼べば

喚ばわせたまうみ声きこえぬ

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

等々の先生のお歌は、よき人の仰せのきわみを聞信せら



「南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本」

そのまゝのお勧めでありました。しかも法然聖人も四十三歳の日「法は深妙なりといえども、我が機すべておよびがたし、經典を披覽するにその智最愚なり、行法を修習するにその心ひるがえつてくらし。朝々に定めて悪趣に沈まんとことを恐怖し、夕夕に出離の縁のかけたることを<sup>来</sup>悲歎す」と大暗黒に逢着せられた時、幸に善導大師の御書に導かれ「一心専念阿弥陀名号……順彼仏願故」の御文にいたつて

「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをや」

と、高声に唱えて、感悦隨にとおり、落涙千行の中に、念仏せられたのであります。即ち、汗かきの乱暴者のために、親が苦心を重ねてお作り下さつた手織の着物、南無阿弥陀仏を頂かれた上に、私共にもお勤め下さるのであります。

更に近角先生の御導きを蒙りますにつけて、

「親の手織の着物は、どの着物も駄目にしてしまう乱暴者の汗かきのことを知りつくされて、その者に着せよとの辛勞の<sup>囂</sup>かたまりである」と、微に入り細に渡つて、或はお聖教をひかれ、或は実例

身はずでに六十を越えようとして居ります。友の多くは別れ住み、或は死別いたしました。幾山河越えに越えた思出は慘怛たるものであります。又痼疾徒食の身は、年々歳々役立たなくなるにつれて、寒風にさらされる枯木の身を感じますが、ここに不思議な方があらわれて、本願大悲の風にのせて、念仏無碍の灰をまいて、枯木の身に花を咲かせて下さる有難さ、申す言葉もありません、

ここにこの十六年間、慈光誌上に両先生の法味を常にかかげさせて頂いて來ました私の心底を申し上げまして、先ず深く諸先生に謝し、且つは遠き宿縁を謝しまつる次第であります。



を示されて、大慈大悲の至極をお伝え下さいました。

「本願や名号、名号や本願。本願や行者、行者や本願」とありますが、池山先生は、名号、近角先生は本願の意趣を、表になり、裏になり、右に立ち左にそい、前に導き、後に押し、点滴が岩を穿つた<sup>た</sup>の通り、私の強剛難化の身に、くりかえし／＼注ぎに注いで下さる<sup>ま</sup>であります。

今にしてこのことを憶うては、まことにただ事ならぬものを覚えるのであります。

福島先生が臼杵祖山老師から聞かれたそうであります。「菩薩とは、或機縁をとおして仏様の徳のひらめきを感じることである」

とか。私は池山先生をとおして、智慧の念仏のひらめきを知らされ、近角常觀、常音の両先生をとおして、弥陀大悲の本願のひらめきを知らされるのであります。そこに、まことに愚悪極りのない我身に、おおけなくも勢至菩薩の智光と、觀音菩薩の慈光を常に蒙つて居りますこと、謝しても謝しつくせませぬことであります。又これをきつかけとしまして、地上に無数の菩薩方の徳光を仰がせて頂くこと、言葉につくされませぬ。

#### アインシュタインの言葉

宗教なき科学は、ひつこであり、科学なき宗教は、めくらなのである

ロシアが極度の諸困難を排して、旺盛な行動によつて初めて計画経済の実際的可能性を實現したことに対して、すべての国家が謝意をいだくときが必ずやつてくるでしょう。……しかし社会主義経済を確立しさえすれば、人類のすべての社会的、政治的悪弊がいやされるだろうと仮定することも誤りです。

#### パスカルの語録

われわれは、われわれと同じような仲間との交際に安住することを樂しみとしている。

彼等はわれわれと同様に悲惨であり、われわれと同様に無力である。

彼等はわれわれを助けてはくれない、人はひとり死ぬてあるう。



池山先生建碑讚

仰慕 香川 玉尾 延忠

池山先生記念碑除幕式に詣て

苔寺の苔の朝光おのづから浄まりてゆく今日のつどひに  
寂かなる光の降るがごとく散り桜わくから葉落ちつづくとき  
登り来てひと息いこふ芝たひら川をへだてて石碑は建てり  
碑の建てる栗山の前は川をつくり三つの踏石また石橋を  
枯芝に石の面にさす日の柔し仰慕して来しこころ足らひに  
さゆらぎもなく桜葉の影だちて秋日に白む大きいしふみ  
賜はりて掛け親みし御筆蹟彫り深くして石の南無阿弥陀仏  
燃えに燃えしみのちの焰なほ尽きぬ象徴と建てり名号碑  
これは

除幕式に會うて 吉野 北岡 白道

苔寺の秋をよぎりて浄住寺

秋深く緑の不思議に建ちし碑を

幕除れば秋の木洩日碑面に

幕除られ念仏の碑に天高し

師の碑面南無阿弥陀仏秋日濃し

秋草やただ念仏と刻みし碑

彫り深くただ念仏の碑の秋日

碑の裏に正念直来風の虫

御曹子咳し給へば先師かと

先師来て説き給ふかと堂の秋

方丈の一座秋日のさし明かる櫓にからすの澄みとほるこえ  
方丈の秋日あかるき廂より落つるひと葉のながきたゆたひ  
六高の授業中より耳にありて面影に顔ち今に聞こゆる師の  
南無阿弥陀仏  
自然石にただ南無阿弥陀仏寂びふかきみ声とみ筆さながら  
にしもえらせたまへり

記念碑の裏とこ得て晩年の一つみことば「一心正念  
直来」

念仏を説かせたまひて先生のせつなきこころ「一心正念  
直来」

流涙を拭ひあへざる法の秋

秋潮の寄せては浸す吾の心

秋潮の来たり芥を洗ひけり

ほの／＼と心足り辞す堂の秋

みのりの書を賜りて 京都 山村 信子

賜りし仏書謝しつつ秋灯下

仏書拝読蒼天窓にくぎられて

鳴きはげむ虫にならひてみ名称へん

秋陽燦罪障重しと嘆くまじ

落葉炊く寂かなるものしたはしく

月中天独りの我に對ひるて

十月廿五日、第二十七回一道会が開催された。昨日まで天候の心配で落付かなかつたが、今日は晴天絶好の秋日和である。愛媛大学の仏青男女学生十五名も例年の如く三日前から来ていて松本先輩教授の指導下に、風は奈良や宇治の仏教史蹟研究に行き、朝は本堂で坐禅、夜は先生の講座というプログラムで今日に至るのを待っている。特に昨日は境内の清掃を「行」の一環として手伝つてくれた。

今年は特に廿七回忌を記念して池山先師の名号碑の建立が同信諸賢の力で完成し、今日は午前十一時からその除幕式が行われた。名号碑募金は比較的多額と思われる額を立案して発表したので一抹の不安がないでもなかつたが、實際の応募金額は予想をはるかに上廻つて、碑の建立のみでなく先師の『意訳歎異鈔』の重版もこの御芳志によつて行われるほどになり、御遺徳の前に頭が下がるのであつた。私は当寺の境内に碑を建立するためもあり、碑石の選定から碑面の彫刻、周辺の整備にいたるまで一切をまかせられたので実のところ半年間は心を馳せ緊張の連続であり小妻

くとも二千年は、南無阿弥陀仏が厳として群首を光被して下さる。お念仏一つですよとほほえみ続けて下さる。そういう如來真実を証せんための名号碑となることを念じてこの碑石が選定された。そんなことを思つて私はこの石にきめたのであるが、これはまた御芳志を寄せて下さつた方々のお心であると思う。

碑石を売つて下さつた方は、そんな尊い碑を建てるのに使つて下さるならばといつて三万の代金から二万円を寄附して下さつた。又意訳歎異鈔の印刷屋は注文部数の外に百部寄附して下さつた。

私は有難いなあと感激をこらえた。然し憶えば、こういう有難いことがあつても不思議ではない、といつてこうなれば嘘だといふのではない。この位の餘慶があつても驚かない。まことのあらわれとは観念や思弁などの中にピカピカ光っているのではなくて、もつと廣大無辺に真事に建現するものである。その直実の頭れの片鱗であると私は感じるのである。正法に不思議なしとはそういうことも含んでいるのではあるまいか。

○ 当日、碑の前の参道の傍、楓の葉の下で仏青女大生が受付をやっている。参会の人々が三三五五あらわれる。風のお弁当の食券を渡す。先生の御長男池山寿夫様の一団が見

と口論になつたりしたのは度々のことである。まことに先師の遺徳を万世に伝えるための名号碑の建設であつても、出てくるものは悪性更に息め難い自己の露呈であつてつくづく私というものの真姿を知らされる毎日々々であつた。碑石の運搬から場所の選定、これには庭園師の意見もきき周囲との調和、どこかに枯れ沢を造つて、その土を盛り上げて、吾等と「一つ」に親しめる名号碑にしたいなど、煩惱は無尽であり思ひは乱れ、石屋も来ない庭師も来ない時には、なるようにしかならぬと思ひながら期日が迫るし、すこしは落着いた景観にしてと当日を迎えたのだが仲々はかどらない。……今日を盛大に迎えるに当り愚痴の一端を露呈し皆様に低頭三拝する次第である。

碑石は良いと思うものが、も一つあつたが二三百年しかもたないそうだし、この方は二千年位は大丈夫とのことでこちらにきめたのだつた。この浄住寺は七百年前からの浄地で堂宇も興亡隆替を重ねて今日に至つているが、たとえ將來堂宇は壊滅に帰し京都西山の中腹が雑木蔓草に埋もれる日が来ても、そしてまた「経道滅尽」の時になつても少

える、広島での先生の初転法輪のお寺、輦の明円寺の松江老師が八十の老齢で法友と共にくる。古い人々、毎年の人々、未知の人々、五十余人が参集した。花田先生夫妻がようやくみえる、白井先生、井上、中井、佐々木、向島等諸先生が集られる。午前十一時すぎいよ／＼除幕式である。松本先生が桜の木の下で司会、私が会計報告をかねて経過報告をする。御長男寿夫様の手によつて碑の幕が引かれてここに名号碑は正しく開頭された。明円寺様の導師で既に配られた重誓偈を会衆一同は秋晴れの名号碑前で莊重に朗誦奉誦、各自の焼香によつて無事に式は終つた。

それから碑の前後に上敷をしいて三々五々名号碑の周辺の庭で風のお弁当を頂く人々、お座敷で頂く人々、その他境内あちこちで和やかな空気を一ぱいただよわせた。私はその間、名号碑の庭に下りたり座敷へ上つたり、先生のお好きだつた「城ヶ島」のレコードをかけたたり、一猿六窓の心のままに走り廻つていた。

待ちにまつた今日がきて、午前の除幕式もほんとに気持ちよく運んだので、心身ともに軽々としたのだつた。その間にも参集の人々が続いて、今日の会衆は百二、三十人であつたろうか。

午后一時、先師第廿七回忌を厳修、私が司会して、阿弥陀經の斉称、歎異鈔の奉誦をもつて終つた。それから例年の

ように諸先生方の追憶と御法味が次々くりひろげられた。

最初に、池山先生の最も古い御弟子である明円寺の松江岩人師のお話である。

私は八十二才、一番先生と因縁が深い。此処に見える御長男の寿夫さんが四ツの時、明治三十六年秋から先生の御世話になつた。東京神田の須田町で先生が煙草屋徳香社を開かれた時代で、寿夫さんを神田あたりの木馬にのせて遊ばせたこともあつた。徳香社とは姉崎正治博士がつけた名である。先生にお会いしたのはもつと前の真宗中学四年の時、近角常観師、清沢満之師が講演に来られた時である。先生はその時洋行帰りで襟の高い本当のハイカラー姿であつた。先生は独逸協会学校第一回卒業生で同窓には後藤新平氏もいた。

例の宗教法案の大問題の時、近角師と共に旬仏上人の顧問として法案反対運動につとめられ、それが成功しその功勞に酬いて歐洲遊学を命ぜられた。それは石川舜台師の内局時代であつたが、内局が倒れ早く帰朝された。先生はドイツで視察研究した社会事業を日本に実現しようとし、後藤新平氏、時の桂首相、台湾民政長官の兒玉源太郎氏などの後援でここに神田須田町の徳香社が始められた。この時

くりして「池山君よく念仏するなあ」と感嘆されました。

前講を池山先生がやられたが、その演題は「廻心えんしん」ということだ。たびあるべし」であつた。講演を終つてから近角先生は「池山君が六ヶ敷い題を出したので何を云い出すのかと心配したが実に有難かつた」と云われ、池山先生に「君はいつの間になんかに立派な信仰になつたのか」と驚きと喜びの言葉をかけられました。

先生の御講演のうちで思出すところは「親鸞は父母孝養のためとて一遍にても念仏申したることいまだ候わず」のお話であります。「岡山の同行達は、私が常に母と一緒に歎異鈔を読むのを見て、池山は孝行者だというのが私は母への孝養のためと思つて歎異鈔と一緒に拝読したこともお念仏したこともない。仏様のお慈悲に感謝してお念仏申し、又歎異鈔も拝読する、母も喜ぶので母と一緒に拝読するのです」とのお話でありました。

又奥様が胃痛にかかられて、近角先生をお迎えて御法話があつたとき、先生は頻りにお念仏されるが、奥様にはあまり念仏が出ないで落着いていられる。その違いを私がお尋ねすると、先生は、「私は有難くて唱えるのでは無い。現在の苦しみの中に困ると出る念仏である。松江さん誤解してはいかん、悩み出すと出る念仏、そうだつたとはげまされる念仏なのだ。家内は助けられきつていたので、

政府が得意先に紹介状を書いてやつたのであつた。この頃は徳香社に入つた。番頭も居つたし私は得意先を廻り煙草を売つて歩いた。その頃日露戦争が始まり、煙草が政府の専売となつてからは小売店となつた。日本で始めて絵葉書を買つたのも徳香社であつた。

先生は経営に苦心されたが遂に失敗に終つた。それから先生は森川町の求道会館へ近角先生の御講話を聞きに参詣されるようになり歎異鈔にここで親しまれたようであつた。

当時先生はドイツで感染された皮膚病のために常に手袋をはめておられた。先生は真宗大学をやめられてしばらく浪々の生活をされたが、沢柳政太郎氏の世話で岡山六高の教授になられた。そして岡山の後樂園の橋のたもと昔の士族屋敷に住まわれた。私は鹿兒島に帰つたが大正二年の夏に福山市鞆町の今の寺に入つた。再び先生と近くなつた。

忘れもせぬが大正六年の夏のことである。近角先生は夏期講習会で山口をすませて高松へ行かれるので、それを鞆の私の寺でお迎えして、近角、池山両先生にお講話をお願ひしました。

先生は御家族五人で鞆で近角師を迎えられました。近角先生はその時池山先生の口からお念仏がよく出るのにびつ

いつ終つてもお浄土と安心しきつて居る。それで余りお念仏が出ないのだろう。『親鸞におきては』とあるのを『池山におきては』とおきかえて『ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし』とよき人親鸞聖人の仰せを蒙つて……これが有難い。ここが私の信仰を一変させた。未来のためでなく今の救いだつたと知らされたのです。」と申されたのを記憶して居ります。

松江老師は遠い昔の先生を回顧して大体右のようにお話し下さいました。

(因みに、この原稿を書いている時、明円寺総代とある端書がきました。それによると松江師は去る十一月二十八日に御往生になつたとありました。感無量であります。恐らく一ヶ月前のこの建碑式に御導師をされ追憶談をこのようにされたのが最後の地上における先生とのお別れであつたと拝察いたします。南無阿弥陀仏)

次に池山寿夫様のお話は次のようでありました。

今年廿七回忌だそうで、という申訳ないが、実は私は何回忌かを考えたことがない。命日も思い出す位のもので。言い訳ではないが、私にとつては毎日が命日、毎日父が来てくれているような気がするのです。そんな私なので一追会のおかげで廿七回忌を気付かせて頂くようなことで

す。自分ながらまあ何という子だろうと思ひます。

然し私は胸を張つていう。父は、それでよい、それでよいと笑うている。今松江さんのお話によれば、私は松江さんに抱かれてお世話になつたそうです。今日四十年振りにお会いしたのです。時の流れに心を打たれるのです。父が亡くなつて二十七年、松江さんとは四十年振りにお会いする。その間色んなことが起つたり消えたり。その頃は勿論私には子供はなかつた。今は子供があり今日もここにきて居ります。弟も妹も生きています。

年を忘れても、年は毎年くる。丁度渦が巻いているようでありませぬ。渦の分子は刻々に変つており、その間には切り難いきつながら縦に横に結ばれている。悲しみ苦しみ喜びが流れる姿に打たれるのです。

今日除幕式をさせて頂いた父のあの名号碑の前に、これから何れ程の人々が立つだろう。喜び、悲しみ、苦しみを抱いて。——人生の燃焼の仕方は種々様々あるが念仏は完全燃焼の炎でありませぬ。父は人々と共に、南無阿弥陀仏と言つてくれるでしょう。

父はお客が好きでした。話をする、聞く。歌と一緒に歌う、お念仏を唱える。父はなんでもかんでも皆お慈悲の話にしてしまう。ある時には夜の十二時、一時までお客と黙つて坐つて居ることもある、お茶を飲んで念仏して

うです。とに角、全級百十八人中の百十六番で私は二年に進級しました。その通知簿の成績を父はみても何とも云わない。どんな顔をしていたろうか、父の顔を見ることが私には出来なかつたのでわかりませぬでしたが……。

其日、父は散歩に行こうという。後樂園へ父について行きます。向うから八木先生——鉱物の先生で、この先生が高校と中学とを教えているのです。その先生がやつて来るのです。そのベンチに三人して腰をかけました。八木先生は私を見て、父に「この方は？」と尋ねました。父は「私の息子です」と、さらりと答える。八木先生は「ハア、これがあなたの御息でしたか」と喫驚した様子でした。私は、父は恥ずかしいことだろうと思ひました。すると父は畳みかけるように重ねて云いました。「そうです、これが私の息子です」——私を抱きしめるような父の姿、その横顔、私はとても嬉しかつたのです。

二年生から私が勉強しだしたのは、成績が悪かつたから勉強しようとの反省よりも、恥ずかしさも無く、私を抱きしめて居る父の胸、それが勉強させたのです。好い父、温い父でありました。私の父はそんな父です。

皆様有難う御座いました。

(感想) 私はこの講話を講壇のすぐ近くで聴いていました。司会役だつたからです。お話を伺つてメモを取つて

る。私は父は迷惑だろうと思つたことです。ところがそんなに遅くなつて帰るお客を送つてからの父は、よう／＼帰つたという表情を一辺もしたことがない。いつも喜びの表情を顔にあらわしている。結局、父の心は、色々なものと取つ組んで、種々様々な姿を見ている。或は自分がそうやつてきた過去の姿を眺めて、同じ姿にめぐりあつている。悟り澄ました人間でなく、傷だらけの姿、そんな人間が大好きな父ではなかつたかしらん。

今日の父へのはなむけとしたいことを申し上げます。

私は中学で成績が悪かつた。同級生四十四人のうちで四十三番でした。二期には四十番になつた。岡山中学は、所謂、名門校であつて「丁」があると落第です。私の成績薄にはそれが二つか三つあつたのです。父と母は心配していました。然し当の私は、成績の悪いのは先生が悪いからだとすましていました。

然し三学期の試験となつて勉強しようとなつたのだがノートがない、友人のを借りるのも厭だ、本屋へ行つて薄つぺらの辞書を買つてきて片つ端から単語を暗記する、辞書の丸暗記でどうやら落第はまぬがれました。

父は高等学校の先生だが、同僚に中学の教員をかねている先生があるので、私のこともその同僚から聞いてよく知つて居るのです。実際職員会議などで私の名も出るのだそ

いる胸には、在りし日の先生のいろ／＼の場合の姿と声が浮んできましたが、その中でも、私が出征する通知を差上げた晩、丁度近角先生の御息の出征の通知と二つの知らせを胸にされた先生は一夜、転々反側、眠られなかつたとのことを奥様から伺つたときのその感激に再びひたつたことでありました。

次に白井先生にお願いしました。あらまは次のようであります。

私は池山先生には直接お目にかかつたことはありませんただ長く近角先生のお世話を頂いておりましたので、その間に池山君が、というお噂を聞いております。また御著書を拝読しております。そんなことですが、ここ数年こうして一道会に参り、親しく先生の教えを受けられた人々を通じて先生を伺つておる、そういう私であります。

只今先生の古い時代からの親しく教えをうけられたお方また御令息のお話を伺つておりました。池山先生はこういう御方であつたのか、恰もここに出てきてお話し下さつたような大変有難いことでありました。毎年この一道会は感慨深い会合であります。

今年の名号碑が建ちまして、また今月の「慈光」誌の記念号には「業報について」の先生のお話が出ておりまし

源信僧都の法語

た。  
先生のこの文を読み、先生が煩惱悪業の御自分を泌々と感じておられ、その心をもつて人々を抱いて居つて下さることを拝察したのであります。

名号碑の裏に先生の、あの「一心正念 直来」が刻まれております。これは「業」の文章と表裏しておると感じるのであります。この語は、仏教の何の仏様もそうではありませんが、其等諸仏の願いを成就して、仏の真髓である名号となつて現れて下さつた名号の心を、それを、池山先生は「オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」と言つて下さつた。今御令息が云われた、あの御令息を抱くようにして八木先生に向かい合つて居られる姿、その姿が……。仏様が私を抱いて下さるそのお姿が……。 (先生嗚咽しきり) :  
……どうも……。どうも……。有難うございました。

(附註) 先生の御話はもう続けられなかつた。緊張の中間から温かいお念仏が漲つて、参ずる会衆一同は先生と俱に大悲に落涙称名するのであつた。 (未完)

そもく観無量寿經を案ずるに、云く

「或は衆生あり、五逆十悪を作りてもろくの不善を具す。かくの如きの愚人、悪業をもつてまさに惡道におち多劫を経歴して苦を受くること極りなかるべし。かくの如きの悪人命終の時、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説いて教えて、仏を念ぜしむるに遇えり。かの人苦にせめられて仏を念ずるにいとまあらず。善友告げていわく、汝もし念ずることあたわずば、まさに無量寿仏と称うべし。かくの如く心を至して声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称す。仏名を称するが故に、念々の中に八十億劫の生死の罪を除き、命終の後に金蓮華のなほし日輪のごとくその人の前に住するを見て、一念の頃のごとくにすなわち極樂世界に往生することを得たり」

この文われら來世の誠証とするに足れり云々。

僧都はこの下品のところに「己が分」を見出されて常に人にも勧められている。



### あとがき

年の間常に法炉となつて下さると知り、四方に謝しまつるばかりであります。

先月号にも誌しましたが、近角常観先生の懺悔録と信仰余瀝が京都の文明堂書店から近く再版されることになりました。いづれ出来ました時は詳しく申し上げますが、日本の重大時の今日、御著書となつて先生の德音がひろく潤飢をうるおして下さることを切望しております。

仏陀の涅槃会が二月十五日、聖徳太子の御忌日が廿一日、まことに仏教徒にとつて大切な月であります。曇鸞大師が「草を置いて牛を引く」如く、吾々は仏陀の善巧方便の力で導かれる外に、道を進むことも出来ない凡夫であると、述べていられますが、聖目を迎える毎に念仏の御催促を蒙り乍ら生死の海を渡らせて頂くばかりであります。

さて昨秋の一道会の讃歌と記事を頂きましたが、何よりもいたましく思いますことは当日御出席下さつた鞆の松江岩人師が一ヶ月目に急逝せられたことあります。八十二歳の高齢ながら最後の恩師への御礼を先生の名号碑の前で遂げられましたことは、御縁の深さに襟を正さしめられます。榊原師の御懇念によりまして、よき場によき碑をお運び下さいまして、これから三千

十二月初旬に福島先生から観無量寿經の講話を聞かせて頂きました。先生は毎日御入院中の御息を見舞われていられます上に奥様も御丈夫とは申せない中を御来講下さいました。その中で「観經の下身下生のところに自分は行きたくないのに矢張りそこに落ちてゐる」と仏智に照らされての御自身を懺悔されつゝ弥陀大悲の念仏を讃仰して下さいました。何れ誌上で詳細に御紹介申し上げますがここに老先生の勞を謝し上げます。

### 御 桑 内

毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会館。真宗講座。市電、新郊通二丁目下車東へ二丁目。

毎月廿四日午前、午後、昭和区小桜町教西寺、法話会、市電、御器所通り下車、桜花学園東側。

定 価 半年 二百円(送共)  
一年 四百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫  
名古屋市南区駄上町二ノ八八  
印刷人 本田 政雄  
名古屋市南区駄上町二ノ八八  
発行所 慈光社  
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十七卷 第二号 昭和四十年  
昭和二十一年四月七日

二月十五日 発行(毎月一回十五日発行)  
三日 第三号 郵便物認可